

「すり替えられた敵はイエス様」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

November.16.2025

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

Preface

先週は、サタン悪魔のなす最も大きな仕業は、「人にとっての敵は、人だ」と思わせること、私たち人間に、この地上のことだけを考えるように仕向けていく上で悪魔にとって最も大事な策略こそが、人を敵だと思わせることだということについて見て参りました。

悪魔は人に対して、人を敵だと思わせ、人と人を互いに傷つけ合わせ、憎しみ合わせ、互いになくってはならない体の部位同士のようなその関係を崩壊させようとします。

そうして、私たちをどこに至らしめるかと言いますと、神の存在を疑わせ、最終的に、神を敵だと思わせるようにします。

そして今日考えたいのは、もう少し厄介なと言いましょか、巧妙なサタン悪魔の術中についてです。

どのような術中かと言いますと、神を敵だと思っではないし、むしろ、「神を信じている」と告白し、自負しているにもかかわらず、実際は、神に敵対していることになってしまっているような人間関係、私たち人間の、あるいは信仰者の姿についてです。

聖書の中に、具体的な例が沢山出てきます。

Part One

例えば、先週見ましたアダムとエバです。

最初の男アダムは、「あなたこそ私の骨の骨、私の肉の肉、あなたは私自身であり、あなたあつての私です」と人類史上初のラブソングを捧げた愛する妻エバを、「この女が、この女のせいで、こんなことになってしまいました」と責め立て捲し立てながら主なる神様に訴え出ましたが、その時のアダムの気持ちは、至って正しい思いであり、善なる正義感に包まれていたであろうということです。

ですので当然、天地万物をお造りになられた父、御子、聖霊の三位一体なる神様に対する信仰が薄まったとか、あるいは神を信じていないなんていう自覚は全くもって無かったと思います。

むしろ逆に、「信仰ゆえの正しい指摘、的確な判断が出来ている」と、「神様あなたが間違っているんです。あなたに正しい事実をお教えしましょう」というような気持ち？、信仰のような思いで、「私の信仰は強い」、または、「この人より私の方が正しい」と思っていたことでしょう。

でも、そのような思いに反して明らかなのは、エバを憎しみ、恨み、責め立て、非難し、見下げ、見下ろし、評価し、「あの人はダメだ、劣っている」と訴え、訴え出る以前にそう心のうちで思っているという時点で、もう既に神に敵対してしまっているということです。

では、なぜ、これが神に敵対していることになり得るのか？

先週、創世記1章の御言葉を見ましたが、神が人をお造りになった時、どうお造りになったのでしょうか？

神は、人をご自身のかたちに、神の似姿にお造りになりました。

つまり、人を見れば、そこに神の尊さ、神の麗しさがあらわれる。

人が人を見た時、当然のように、そこに神の尊さ、麗しさを見出せる、見出しながら互いのことを尊ぶ関係を作り上げていくことが出来るということです。

私たちは本来、人を通して、神というお方がどういうお方なのかを知り、感じ、見る事が出来たというのです。

人の姿に、愛なる神を見るということです。

考えてみますと確かに、キリスト教の宣教や伝道も、神様が直接現れなさって、または復活したイエス様がどこにでも、誰にでも直接現れなさって下されば、もっと簡単で、もっとスムーズに進むかもしれませんが、神様は、そんな方法をお取りになりませんでした。(もちろん、たまにそういうことがあります)

では、どんな方法をお取りになられたのか？

使徒ペテロが宣教を進めていく時、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と、生まれつき足の不自由な人に対して語り掛けたことがあります、これが神のお取りになった方法です。

つまり、ペテロという人にあらわれる神の似姿、神のかたち、イエス・キリストを通して、人が神を知れるようにされるのです。

キリスト教の宣教というのは、ある意味、人が罪を犯す前の本来の人としての姿の回復、神の似姿、神のかたち、キリストの香りが人にあらわれるという神の創造秩序の回復、再現とも言えるかもしれません。

ですが残念ながら、アダムは、エバの中にある神の似姿、神のかたちが見えなくなってしまいました。

なおもエバの中にある神の似姿、神のかたち、神の尊さ麗しさではなく、サタン悪魔に誘われて、エバの悪なる部分、罪なる部分、足りない部分、暗闇にしか目が行かず、さらには、エバの悪なる部分、罪なる部分、足りない部分、暗闇を指摘出来ることに自ら酔い、自分の正義感を振りかざし、エバよりも信仰に厚いように見せかけ、自分の正しさに粹がり、カッコつけ、自信をもって独り善がりになり、エバを敵と見なすようになりしました。

愛するはずの、愛していたはずの妻エバを、自分の敵にしてしまいました。

結果、エバの中に神を、神の愛を見出すことを怠り、諦め、出来ずに、神に敵対する者となりました。

Part Two

エペソ書の著者である使徒パウロ先生も、かつて、人の中に神の似姿やかたちや尊さを見出す代わりに、人の間違いを指摘出来ることに酔い、自分の正しさに粹がり、自分は他の誰よりも信仰に厚いと真顔で思い、見せかけながら、自信をもってクリスチャンたちをとっ捕まえて、牢獄にぶち込み、殺すことに加担していました。

そんなかつての使徒パウロ先生、サウロに、イエス様が直接天から語り掛けて下さったことがあります。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである」とです。

その時サウロが迫害し、とっ捕まえていたのはイエス様ではありません。

主イエス・キリストを信じるクリスチャンたちです。

ところが、イエス様がサウロに語り掛けたのは、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と、あたかもサウロが迫害しているのはクリスチャンたちではなく、イエス様ご自身が迫害されている当事者であるかのようにお語りになりました。

つまり、イエス様がサウロにお語りなされた本意は、「サウロよ、あなたは『熱心な信仰だ』と思いながら、または、『神のためだ』と言いながら、その目の前いる人に対して、その人の中に、神のかたちを、神の似姿を、神の尊さを見出すことが出来ていないではないか！ 人のうちに神の似姿を、神の本質の完全な表れであるわたしを見出すことが出来ていないこと自体が、あなたの誤りであり、神に敵対していることなのだ！」ということでしょう。

今日の説教題を「すり替えられた敵はイエス様」としましたが、正に、悪魔によって敵をすり替えられたことにも気付かず、結果的に、人を迫害することをもってイエス様を、神を敵としてしまっていたということです。

かつてイエス様が、「この最も小さい者にしたことはわたしにしたことであり、この最も小さい者にしなかったのは、わたしにしなかったことなのだ」と仰ったことがあります。

そして、「人の中に神の似姿を見出せないように誘うのが悪魔の仕業であり、その仕業に乗っかって行くのか行かないのかが、血肉に対する戦いではない、敵をすり替えていく悪魔の策略に対する戦いだ」とお語りになったことがあります。

マタイの福音書 25 : 31 - 46 (パウロ)

「最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。この最も小さい者たちの一人にしなかったのは、わたしにしなかったのだ。その最も小さな者にわたしを見出すことを怠ったのろわれた者どもよ。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ」と仰います。

即ち、人の姿に、人のうちに、その人を見て、そこに神を見出させないことが悪魔の策略であり、悪魔の策略に乗っかっているということになり、結果、神に敵対し、神を信じる事が出来ていないことだということです。

私たちの戦いは、人に神の姿を、イエス様のお姿を見出すのか見出さないのかの戦いであり、サタンは、その人に神の姿を、イエス様を見出させない罠を仕掛けてくるということでしょう。

このイエス様の話を直接聞いていた弟子たちでさえも、弟子たち同士、「誰が一番偉いのか」とイエス様と共に過ごした3年間ずっと考え続け、互いに批判し合い、互いに評価し合い、互いに見下し見下ろし合っていました。

サタンの罠に掴まれていることを知ってか知らずか、「神を信じる者として、正しい判断のもと評価している」と思い続けながらです。

そして、結果的にどうなったかと言いますと、イエス様を見捨てて、逃げて行きました。

そんな弟子たちに、十字架の死より復活されたイエス様が現れなさって仰った言葉が、そんな彼らに対する答えのようなお言葉だったように思います。

ヨハネの福音書 20：22－23 (パウロ)

イエス様は弟子たちに息を吹きかけながら、「聖霊を受けなさい」と仰り、「互いに罪を赦し合いなさい」とお語りになりました。

息を吹きかけながら、「聖霊を受けなさい」と仰った場面は、どこの場面を連想させますか？

創世記 2：7 の人を神の似姿にお造りになった時、神が、人にいのちの息を吹き込まれたあの場面ですね。

つまり、「聖霊を受ける」とは、神との関係の中で初めて人は人らしくあるというあの創世記の罪を犯す前のアダムとエバの美しい、互いが互いに神の似姿を見出すことの出来るあの関係に回復させて頂ける、「回復しなさい」ということです。

悪魔悪霊のそそのかしに乗っかって、「この女が、この人のせいで、この人が悪いんだ」と堂々と宣うようになってしまったところから、本来の人らしい美しい関係回復が、「聖霊を受けなさい」ということです。

聖霊を受けると、その人の悪いところ、その人の足りなりところ、その人の闇の部分、その人の罪な部分が自分ごとのように感じられ、それが痛みとなっ

て迫ってきて、むしろ、その人のうちにある忘れ去られてしまった神の似姿を見出すことへと至ると、罪を神にあって互いに赦しあうという神の業があらわれるということです。

私たち罪人は、自分のうちに善ではなく罪が住んでいるゆえに、至って自然と悪魔の誘惑に乗っかって、悪霊に誘導されて、何の努力もなしに至って自然と人を非難し、人を見下し、人を敵としてしまうことが何の無理もなく出来てしまいます。

そんな私たちの毎日求められていること、毎日求めなければならないのが、悪霊ではなく、聖霊です。

聖霊なる神様の満たしです。

聖霊なる神様の満たしを求める祈りと、御言葉と賛美のうちに聖霊の満たしを求めるのです。

エペソ書 5：17，18 節の

愚かにならないで、主のみこころがなんであるかを悟りなさい。ぶどう酒に酔ってはいけません。むしろ、御霊に満たされなさい。(パウロ)

という御言葉通りです。

私たちへの主のみこころは、悪霊ではなく、聖霊に満たされることをもって、人のうちに神の似姿を、神のかたちを、主イエス様を見出すことです。

赦し、赦しあい、愛し、愛し合うことです。

Part Three

今、私個人的に、第一第二サムエル記をゆっくりじっくり読み進めているのですが、そこにあらわれるダビデの姿とサウルの姿に、今日のメッセージの内容そのものを見るような気がしております。

ダビデは、サウル王からどんなに槍を投げられいのち奪われそうになっても、執拗な追跡による不条理な殺害予告にあっても、最後の最後までダビデは、サウルのうちに、神の似姿、神のかたち、神に愛されている存在であることを見出し、尊重しようとしていました。

そして、それこそが、自分に対して神様が一番に望まれている神のみこころであり、すべての人間に求めておられる神のみこころであることを確信しながら、実践しました。

そして、それを成さしめたのが、聖霊なる神様の助けと導きです。

そんなダビデの生き様に感化されたイスラエルの民たちは、サウル王が亡くなった際には、ダビデと一緒に、主の油注がれた人として尊重し、その死を悼み悲しみました。

一方サウルは、最後の最後まで、悪霊の導きに従ってしまい、悪霊がささや

き、悪霊が誘う偽の正義感、偽りの確信に心を任せ、ダビデのうちに神を見出す代わりに、ダビデを迫害しました。

ダビデとサウルの生き様を見ますと、聖霊を受け満たされることを大事にし、人のうちに神の尊さを見出すことを大事にした姿と、そうではない姿がはっきりくっきり見て取れるような気が致します。

Conclusion

今日はこの後、主イエス様が私たちの罪のために十字架に架かり、血潮を流し、体を咲かれたことを思い返す聖餐式がありますが、イエス様こそ、私たちのうちに、神の似姿を唯一疑いもなく見出して下さった愛なる神です。

私たちの罪の赦しのためには、自らが十字架に架かられ解決し、私たちに罪を見出す代わりに、神の似姿、神の子として回復した姿を見出して下さったお方です。

つまり、私たちのことを、余すところなくご自身のように思っただ下さった唯一のお方です。

そんなイエス様を愛する者として聖霊を受け、また、詩篇 32 : 1 - 2

詩篇 32 : 1 - 2 (パウロ)

という恵みを受けた者として、罪の赦しを人にも施す者でありたいと願います。

これこそが、敵をすり替える悪魔に対する唯一の、また最大の対抗措置であり、攻撃となることでしょう。

お祈りいたします。

祝祷：ペテロの手紙第一 4 : 8